

Title	濟州島の潜嫂共同体の生活と仕事：濟州島の潜嫂が伝承した精神世界と生業を中心として
Sub Title	The life and work of the Cheju Island community's women divers
Author	韓, 林花(Han, Lim Hwa) 田中, 聡久(Tanaka, Toshihisa) 朴, 原模(Park, Won Mo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.26 (2001. 4) ,p.97- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20010430-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

チャムス 濟州島の潜嫂共同体の生活と仕事

——濟州島の潜嫂が伝承した精神世界と生業を中心として——

韓 林 花

訳者 田中聡久・朴原模

第1章 はじめに：濟州島の伝統女性社会

濟州島は、韓国の本土¹⁾から遠く離れ、孤立した島であるという地理的条件により、高麗時代以来朝鮮時代末期まで政治家の配流地であった。このことは、兩班文化から派生するある種の周辺文化を生んだ。また濟州島は、様々な租貢や労役の負担、社会の激しい変化などの複合的な理由により、昔から男性が女性より人口統計上は少なかった。儒教的な意味でなくとも、自然と男児選好思想がどの地域より強かったのである。結果的に、「男性は貴重な存在＝単純労働をしない人」という等式が生まれた。それでも濟州島の社会では、男性が女性を露骨に「二等の性」として扱ったり、生活を営む権利の適用されない様な存在、あるいは男性の補助者として見るよりは、対等に生活する権利を持つ者として、生を営み、生活を共有するパートナーと見なす傾向が比較的強かった。

女性に対する見方が根本的に他地域と違ったと言うよりは、女性の労働力を高く評価していることから、女性の社会が独自に本土とは大いに異なった形で形成されてきたと見た方が妥当であろう。濟州島の女性は生活経済に寄与する存在、より直接的には、「働き手」としての比重がより高かったのである。濟州島に「娘を生んだら飯を炊いて食らう」ということわざがある。このことわざは、「娘は仕事をすることで家の富を蓄積するため、(娘を生んだことを)喜び(濟州島では貴重な)ご飯を炊いて宴会をする」という意味である。

これと対になることわざがもう一つある。少し前まで、濟州島の女性は自ら「牛に生まれることも叶わず女に生まれた」と、自嘲していた。事実、昔から濟州島の女性は牛よりもずっと働いていた。いや、今でも牛のように、牛よりもずっと働く女性が大勢いる。

ところで、ここで述べておかななくてはならないことが一つある。濟州島の女性は自分の境遇を悲観しながらも、これとは逆に、これほどの重労働をする自分自身を誇らしく思っているのである。すなわち、「濟州島の女性として生まれたからには、徹底的に責任を持って一家の衣食住を担わなくてはならない」という格言があるが、これを肯定的に捉えると、「能力ある濟州島の女性」、つまり「働く女性」の自負心をよく表している言葉であろうと推測できるのである。

濟州島は元来本土とは違った生業の体系を有している。

朝鮮半島に住む人々の主たる生業は、20世紀の産業化が行われるまで農業であった。これとは異なり、濟州島では「島であるという地理的特性のために、本土と同様の、灌漑水利と家畜の力を基本とする、男性中心の稲作」を主体とする農業は不可能であった。土地の面積も狭く、粟、麦、サツマイモなどの雑穀類を栽培する小規模の農作業（small-scale farming）しかできず、「女性の労働力を中心とし、畑作を中心とする生業」を続けていった。初期より人類学における分類である女性的農経体制（The female farming system）が定着したのである。加えて、海辺の集落に住む女性による裸潜漁業、すなわち「ムルチル（潜水漁業）」が職業的、集团的に生成され、名実ともに女性労働力中心の生産体系を作り上げたのである。

このような生活構造が、濟州島の伝統女性社会と、本土のそれとの大きな文化構造の違いを形成した主な理由であったという見方が支配的である。

濟州島の伝統社会において、男性と女性が対立関係、あるいは主従関係に至るケースは殆ど無かった。現在のように農作物が多様化する前には、全体的に女性のみ、あるいは女性を中心とした生業が続けられてきたが、男性と女性と比較的和やかにそれぞれの「役割」を分かち合ってきた。女性が畑仕事や潜嫂などの「取るに足らぬ仕事」を生業とする反面、「祭祀を行い、官庁に出入りする大切な仕事」は男性の役割であり、子女の婚姻、畑の購入など、「家の問題を解決する」ときは、男性と女性、すなわち夫と妻が議論して決めるのが通例であった。

意識的には、男性が多少優越的な立場にいても、実質的にはほとんど対等な立場で共に生を営んだ。それだけではなく、女性はより能動的、肯定的、そして自主的な生活が可能であった。その理由は数あるだろうが、最も重要な点は、女性が社会経済、生活経済の中心として活躍しており、また経済活動の領域がきちんと保証されていたことである。この様な面が最も顕著に表れる濟州島の伝統的社会共同体が、潜嫂の社会なのである。

第2章 濟州島の潜嫂と歴史

第1節 濟州島における伝統的女性社会の2つの共同体

濟州島の自然環境と生活環境

濟州島は地理的に東経126度58分、北緯33度6分に位置している孤立した島で、全体の面積が1,819平方キロメートル程度の火山島である。

東西に長く、斜めに位置する姿は、まるで1個のレモンが海の中に浮かんでいるようである。特に、島の真ん中には高さ1,950mの漢拏山がそびえ立ち、海から断面的に見ると、島が見えると言うよりは漢拏山のみが見えるようでもある。

漢拏山は濟州島の人々の生活に絶対的な影響力を与えてきた。この山を中心として、どのあたりに住んでいるかによって生業が異なり、生活の質が決定されてきた。

大まかには、漢拏山中腹の比較的肥沃な土地の中山村^{チュンサンチョン}地区に住む人々、海を生活の基盤とし海岸^{チヨン}に居住するケ村地区の人々に、生活圏を大きく2つに分けることができる。

中山村の人々は農業と牧畜業を、ケ村の人々は半農半漁²⁾を生業としており、これによって生活の形態も異なる。

中山村の人々は、自らを朝鮮王朝の支配階級である両班^{ヤンハン}の後裔と任じ、居住地を両班の村と言う意味である「班村」^{バンチョン}と設定した³⁾。これとは反対に、海辺の村は常民の居住地、もしくは海辺という意味を持った「ケ村」と呼んだ。これに加えて、焼き畑や狩猟を生業としている「山村」^{サンチョン}がある。この生活空間領域に対する名前は、そのままその地域に住む人々の身分を表している。この実に興味深い点は、本土のように身分制度がはっきりしていない上、身分による生活の形態が特に異ならないにも関わらず、生活圏領域に限っては身分の区別を表そうとしていることである。

生活圏領域によって3つの呼称が存在するようになった理由は、前にも触れたように、濟州島が長年政治家の配流地として利用されていたこと、行政官庁の設置に伴い流入した両班階級の居住地と土着民の居住地の区別、そして生業の階層化傾向などに求めることができる。

人々の生活には環境と密接な関連性がある。

島という生活空間は陸地と比べると、非常に限定的で狭いものに過ぎない。これを逆に言えば、島というものは海と空がふれあう無限の空間構造を持っている。

海は、上に広がる空の広さほど、下に伸びる水の深さほど、広くて深い。また、四六時

中季節の移り変わりをパノラマとして演出することで、地の境界では閉鎖されたように感じるが、海から見ると無限の空間が開けているのである。

このような濟州島の地理的条件は、ここに住んでいる人々の性格に決定的な影響を与えているのである。

その地理的条件とは、濟州島が持つ特徴である孤立した立地、美しい自然の風景、ひからびている地質、常に荒々しい風、高温多湿の気候などがそれにあたる。したがって、島で生活する条件とは、過去から今日に至るまで、それらに順応し、ときには利用しなければならぬことである。

濟州島女性の特性

女性社会⁹⁾も例外ではない。

濟州島の女性の種のみが特別にあるというわけでもないのに、独特な性質を持った女性集団として認識される根本的な理由は、濟州島が島であるという環境にある。

濟州島の歴史が始まって以来、女性の能力が常に能動的で肯定的に作用して来た島の生活を、また島の女性の生きる過程を、人はとても独特なものとして評価している。

伝統的に、「濟州島の女性」と言うときの普遍的な気質は、例えば活発な気質、隠さない正直な性格、あるいは「女性らしいもの」とらわれない自発的で積極的な生き方、暮らしたための重労働にも屈しない非常にしっかりした明るい開拓者精神の発揮、何事にも与えられた条件の中で全力を尽くす勤勉性などを挙げることができる。

濟州島には伝統的に2つの相反しながらも独特な女性集団が存在した。中山間地帯の中山村の農婦集団と、沿岸地帯のケ村の潜嫂集団である。

一部では潜嫂だけが濟州島の女性であるかのように議論されているが、実は濟州島の女性の特殊性を論じるためには両集団を同時に見る必要がある。濟州島の中山間地帯（ここでは山間地帯を含む生活圏の領域を指す。しかし、中山村と山村の生活の質は異なるので、これについて論じる部分では区別する）に位置する集落の女性社会も、海岸地帯の海辺集落の潜嫂社会と共に、濟州島だけが持つ固有の生を創り出し、営むという役割を担った。彼女たちが創り出した漢察山山間地帯の生活も、海岸地帯の生活と同様に独特である。

同じ濟州島の女性社会であるにも関わらず、潜嫂社会と農婦社会は時代の影響を受けて、すっかり異なる生活圏と意識構造を持つようになったのである。崇需思想で国を支配していた朝鮮王朝期に、ずっと中央政府による配流地として利用されたことが、そのような意識構造を生じる原因となった。

朝鮮王朝の中央集権化政策により、濟州島は3分割された。中山間集落に行政の所在地が定められて官庁が建てられ、配流された人々もこの集落に居住したのである。自然とこの村の農婦社会は、儒教の風習に染まるしかなかった。

農婦社会の労働に関する生活の仕方は潜嫂社会と変わらないが、意識の上では本土の伝統的な女性と同じく、儒教的な思考方式が非常に強かった。その一例として、職業上の理由から便宜的に「裸で、海で働く潜嫂」の集団を、農婦社会の女性らは差別する傾向があった。

一方、潜嫂社会は農婦社会を、中身もないのに怠けながら、実際の生活に何も関係がないのに両班の家の奥様を演じている集団、と見なしていた。

一例として、ケ村の女性がワカメや魚を売りに中山村を訪れる際、ケ村の女性はキセルを口にくわえて自由奔放に取引に当たった。中山村の女性は、彼女らをはしたない存在として離れた場所に立ち、取り引きする商品を指で指すと言うように接触を憚った⁵⁾。

したがって、2つの女性集団は日常生活に必要な物々交換のみは活発に行ったが、それ以外の生活においては特に交流がなかった。男性の社会も同様であった。それだけでなく、両地域社会は互いに婚姻を忌避し、あからさまにはしないけれども排他的な関係にあった。

この2つの女性集団とは別に、山村の女性社会は両集団から徹底的に孤立していた。山村は、漢拏山の奥地の草原地帯にある朝鮮時代の国馬場の上側に位置し、その集落数も多くはなかった。この地域の人々は、おおよそ中山村やケ村に属することができない人々であって、生業の手段が狩猟や焼き畑を作り、豆や蕎麦などを小規模に耕作しながら暮らす火田民であった。

中山村とケ村では、山村を認識してはいるものの、日常の生活では特に気にも掛けないほどの微々たる存在であった。

したがって、濟州島の女性社会を論じる際、しばしば農婦社会と潜嫂社会に大きく二分する。実際に山村が小規模であったので、生活圏として分類するにはいささか無理があるように思われるからである。

現在は両女性社会の境界がほとんど崩れてしまい、また以前の特徴的だった濟州島女性の性質も薄れてしまった。これは、濟州島の生活環境が急変したからである。中山村とケ村の区別が無くなって境界が曖昧になり、産業の再編によって両地域間の生業の違い、また生活文化の異質な要素が混ざってしまった。

今日では、ただ潜嫂社会のみが昔からの固有で特殊な生活の命脈を維持しているだけで、以前の枠組みは無くなってしまった。

第2節 濟州島の潜嫂の世界

この節では、可能な限り現場を中心として、事実をそのまま伝えることに文章の焦点を絞ることにする。それと共に、濟州島社会の中で潜嫂はどのような人々であったのかに焦点を絞ることにする。なぜならば、潜嫂の社会は実在しながらも非常に観念的、皮相的であるため、現場の調査者や研究者の主観によって解釈が異なる可能性もあるからである。この様な議論の誤りを最大限避けることで、客観的な研究結果を出そうと試みたい。

濟州島の潜嫂の世界

濟州島の実生活で、海岸集落の住民は、海の持つ特殊な資源を独り占めできる立場にあることから、その資源を全面的に確保することで、中山村と比べると生活に必要な生産品目の多様化をもたらした。このことは、多かれ少なかれ生活における余裕をもたらした。したがって、中山村が全面的に農畜産物に生活の全般を依存することに比べて、相対的に若干の余裕があった。

また、集落と集落、中山村とヶ村と山村等が、相当離れて立地しており、生活環境における視覚の範囲に他の生活圈や土地などが入って来ないため、自分たちが孤立した状況にいるという心理的な葛藤が比較的少なかったことなどは、島の生活にとっても肯定的な効果を与えた。

これに加えて、作業の空間を共有する女性職業人の集団が形成されながら、彼女たち特有の性格を備えた共同体、すなわち潜嫂社会の構築が可能であった。

潜嫂の歴史

濟州島にいつから潜嫂が存在していたのかは、誰も正確にはわからない。あたかも人類が農作業を自然に始めたように、潜嫂も自然の環境と生活の環境に合わせて自然と発生した職業である。

濟州島を創造したと言われている巨大なる女神「ソルムンデ」についての神話に、漁労行為、つまり潜水漁業に関して詳細に描写されている。

「ソルムンデ」神話には、これ以外にも多くの有史以前における濟州島の生活を推測できるエピソードが羅列されている。農耕社会が濟州島で定着する前、狩猟生活を営んでいた時代に、母系中心の暮らしをしていた当時の社会がよく描かれた物語でもある。

潜嫂はもともと女性のみの職業ではなかったのではないか。

濟州島の方言で、漁師を指す「ボジェギ」という言葉がある。この単語の語源は、「アワビを捕る男」のことである「補作（輩）」である。朝鮮王朝時代に濟州島が朝廷に上納していた貢物目録には、「補作」はアワビ類を、潜嫂は海草類を納めたと記述されている。

「補作」の朝貢の量がとてつもなく、また海に住んでいるために、そんな人とは結婚したくない⁶⁾、と言われるほど酷い収奪であった。それに加えて、儒教思想で武装した官吏が濟州島に赴任してくると、「服を脱いで潜水する裸体操業に関する禁止令」を出したりした。したがって朝鮮時代中期以後、徐々に「補作」はいなくなり、潜嫂だけが潜水漁業を続けたようである。補作が消えたのにも関わらず潜嫂が残った背景には、海草類を貢物として納める一方、貝類は食用としたり換金したりできたので、それらがとても生活の足しになったからである。

以後、朝鮮時代末期の鎖国政策が終わり、日本などから乾物を取り扱う商人らが入り出すようになってからは、海産物の換金がより現実的に可能となった。

この時代を前後して、潜嫂たちは濟州島の漁閑期を利用し、ワカメの採取が終わる晩春から仲秋まで本土に出稼ぎにできるようになった。東海岸ではワカメと天草などを、西海岸ではアワビとナマコなどを、そして南海岸ではアワビとサザエなど各種貝類の採取を主にしながら、一部は董銭田主（ワカメ畑の主人）の引率の下でワカメの採取もした。植民地時代になると、日本全国（サハリン、ウラジオストクを含めて）に出稼ぎの潜水漁業を年中行事の如くするようになった。

国内外での潜嫂の出稼ぎは所得の増加をもたらし、直接濟州島の地域経済に相当な貢献をするようになり、それまでの被差別的なイメージを変えてしまった⁷⁾。

潜嫂は組織的に植民地支配に対する独立運動も熾烈に行った。

今世紀、濟州島における内外での最も目を引く女性社会の活動と言え、ためらうことなく1931年から1932年にかけて組織的に行った「濟州海女抗日抗争」という名称が付けられている濟州島の潜嫂らによる独立運動を挙げることができる。

植民地時代36年の歴史の中で、単一の職種の女性職業集団によって行われた唯一の独立運動として知られている。

濟州島の潜嫂集団の生きる権利を守ろうとする意志から始まった抗日闘争であったが、彼女らが韓国の独立運動に残した足跡は非常に際だっている。

潜嫂集団が独立運動をしたという事実は、その当時の時代背景からすると珍しい「ウーマンパワー」の発揮であった。

日本からの解放後、潜嫂たちは後進の教育に尽力した。集落の海の一部を「学校の海」

と称し、そこで取れたワカメのすべてを校舎の建設や学校の運営費として進んで寄付した。

潜嫂たちの社会活動は、主として長い歴史を持っている「潜嫂会（または海女会）」における満場一致の議決をもって行われた。したがって、潜嫂の間には高水準の討論文化が早くから定着していたのである。

しかし、1970年代初め、水産業協同組合法の下、準行政組織である漁村契が組織され、既存の潜嫂会を吸収統合した。また、それらの長を男性が独占し、すべての活動は事務的なものになった。したがって、現在は潜嫂間の討論が非常に少なくなってしまった。

潜嫂の歴史は、1970年に国家政策として濟州島に観光産業を無理やり導入した結果、大きな変化にさらされ消滅の危機に陥っている。しかし、未だ潜水漁業による経済所得が、他の一次産業に比べて多少高いためにその命脈を保っている。

21世紀の終わりまで潜嫂集団が彼女たちの歴史や社会を継続しているかはわからない。

潜嫂集団は彼女たち同士の規律によって生活と職業を守ってきた。それだけでなく、後進を教育して共同体をしっかりと伝承しているという特徴がある。

潜水漁業は高度の技術を必要とすると同時に、専門性の高い熟練した作業を必要とする。潜嫂社会はその専門性を、教育を通じて後進に伝授するという知恵を有していたのである。これを維持する根幹は、潜嫂集団内の序列であった。序列は階級ではない。単に、職業社会において生ずる先輩と後輩の関係、熟練度の違い、情緒などが内包された位階秩序体制である。

潜嫂社会の位階秩序⁸⁾

「プルトク」とは潜嫂らが作業をする海辺にある露天脱衣場を指すが、もともとの意味は、火を焚く場所のことである。寒い海の中で作業を数時間しなければならぬため、潜嫂作業場には火を焚いて体を暖かくする施設が必ず必要となる。

厳密な意味では、潜嫂共同体、あるいは潜嫂の世界はここから広がっている。したがって、濟州島の潜嫂世界と彼女らが伝承している精神世界を、ここから触れてみたい。

「プルトク」では潜嫂社会だけがもつ位階秩序が厳密に存在する。

潜嫂社会の構成員の組織は、潜水回数と潜水技術、さらには徳性までを基本として、大きく3つの段階に区分できる。

最も潜水が上手であり、長い作業歴を持ち、海の事情に熟知している人を「上群」、あるいは「上潜嫂」と呼び、潜嫂共同体の最も上位の集団を構成している。さらに、「上群」の中でも徳が高く潜嫂の模範になるような年長者1、2名を「上群」中でも特別に

「最古参者」としてとして遇し、格上の扱いをする。

ベテランであっても技術が劣り、浅い海でしか作業ができない「トルパリ潜嫂」や、新たに潜水を習い始めた「子供潜嫂」、年齢に関係なく潜水の技術にまだ不足のある「新米」など、未熟な潜嫂をすべて「チョグン潜嫂」という愛称で呼ぶ。彼女たちを「下群」、あるいは「下潜嫂」という。

「上潜嫂」と「下潜嫂」の間の中間集団を「中群」、あるいは「中潜嫂」と呼び、どの「プルトク」でも多数派である。

普通は1つの「ケグミ」⁹⁾に「プルトク」がいくつああって、まんべんなく居る「上・中・下潜嫂」が作業に当たっている。

共同で「プルトク」を利用する場合、集団別に座る席が自然と決められている。初潜水の「子供潜嫂」、または「下潜嫂」は、「プルトク」で「上潜嫂」の席に座ることができず、これは規律秩序の基本となる。

焚き火を中心として、風を背にする席に「上潜嫂」が座り、その両側に「中潜嫂」が、風向かいに「下潜嫂」が座る。「下潜嫂」は風で飛んでくる火花でやけどをしても、煙を吸い込んでも、文句を言える立場にはない。

もしこのような位階秩序による位置づけが気に入らなかつたり、他所から嫁に来たために同僚とうち解けられずに、離れてひとり「プルトク」で火を焚いたりすると、すぐに「上潜嫂」から呼び出しを受け、たっぷり絞られる。

集落によっては「上・中・下潜嫂」がそれぞれ「プルトク」を作るところもある。

潜嫂社会では「下潜嫂」個人を、またその集団を直接的、間接的に「下群」として差別することはない。したがって、日常では「上潜嫂」と「中潜嫂」だけが存在するようにも見える。しかし、唯一「プルトク」と公的な席では、発言の順序を厳しく区分している。

「プルトク」、あるいは潜嫂会館、漁村契、またその他の集会所で会議が開かれるとき、議題が提示される前には、「上・中・下潜嫂」の間に区別が無く、お互いに冗談をも交わしながら分け隔てなく雑談をする。しかし、討論の議題が提示されると、まず十分な討論を一定の時間行う。次に、本論にはいると、この時点から上下の区分を厳密にしながら、「上→中→下潜嫂」の順序で発言権が与えられると言った制限がある。

またある議案について意見の差があつたり、集団間の見解が異なって結論を出せなかつたりするときには、上潜嫂らの意見が尊重されて、最年長者が出す結論に絶対従わなくてはならない。

この様な秩序体系での年長者への絶対主義は、服従と言うよりは、「プルトク」で長い

歳月を巨大な自然である海と向かい合い、ときに耐えながら切磋琢磨した結果、引けを取らない「上潜嫂」となったため、また、すべての潜嫂から年長者として持ち上げられるまで、厳しい下積みを経ながら、一途に生きてきたその尊ぶべき生涯を、潜嫂集団の誰もが認識しているためである。年長者に最終的な決定権を与えた背景には、人生の権威への全面的な敬服があるのではないだろうか。

潜嫂の訓練・修練

潜嫂は持続的な教育によって育成される、単純ではあるが専門的な職業の一つである。

潜嫂になるためには、潜水術に関する訓練を長い間積みまなくてはならない。

ひとりの潜嫂が誕生するまでには、経なければならぬ段階別の訓練がある。これに従いこつこつ訓練を重ねてゆくことによって、潜水作業を果たすだけの能力が生まれる。そして、本格的に潜水を始めても、初期から熟練期に至るまで磨かなければならぬ技術は数えられないほどある。

1970年代に「海女研究」を著した康大元は、その著書で潜嫂の作業時期を年齢別に、訓練期、見習期、初年期、中年期、長年期、老年期¹⁰⁾等に分類した。この分類は非常に有意義である。この様な多段階の修練過程は、潜嫂だけでなく専門的な職人の世界では、ひとりの熟練工を輩出するために不可欠な道と言えよう。熟練した職人が生まれるまでの過程には近道はない。潜嫂の世界においても全く同じである。

「テワク」¹¹⁾を背負い、潜嫂の道に入ろうと「プルトク」に降りてゆくことは、ひとりの潜嫂が生まれる単なる前触れに過ぎない。その後、海で数多くの試練を経て、矢のように過ぎ去る時間と共に未来へ駆け抜けてゆくと、自分でも知らないうちに済州島の海と一つになり、たくましく生きてゆくうちに、立派なひとりの潜嫂が生まれるのである。

潜嫂になって「プルトク」で生きてゆく間、誰でも結婚、出産を経て、老いて病で死んでゆくと言う人生の通過儀礼を経ながら、心身共に鍛えられてゆく。

毎日、年長の潜嫂の目にかなうように潜水をしているうちに、「子供潜嫂」でも年長の潜嫂が作業をしている海に行くことができるくらい技術が伸びる。

「子供潜嫂」が年長の潜嫂を追って、遠く深い海まで出て潜る日には、潜嫂すべてが息を飲んで緊張する。そして、ついに「上群」の海に出入りし、自由自在に作業ができるようになると、当然「プルトク」での席の位置が変わるのである。

海岸集落の出身者が、「プルトク」の一員、つまりその集落の潜嫂会に名前が登録される年齢は一様ではない。済州島は集落によって水深が異なり、作業場の環境も千差万別で

ある。ある集落の海は水深が浅く海底が単調であったりし、ある村では水深が深いだけでなく、水の流れも激しく海底面も険しかったりする。したがって、潜水を始める年齢は潜嫂が属する海の事情に大きく依存する。すなわち、水深が浅くて作業場の環境がきつくない所では、潜嫂作業を始められる年齢が低いし、そうでない場合は比較的高くなる。

したがって、潜嫂個人個人の経歴を問うと、ある潜嫂は6,7歳から潜水作業を始めたと言い、ある潜嫂は15歳を過ぎ17,8歳から本格的にテワクの荷物を背負い始めたという。

しかし、いくら潜水を始める年齢が地域によってまちまちであるとは言え、初潜水の年齢は18歳を超えない。

「チョグン潜嫂」は、「ブルトク」で生活するとき、すべて「上潜嫂」の指示に従わなくてはならない。時によっては「中潜嫂」が「上潜嫂」の役割を担う。

「上潜嫂」は「チョグン潜嫂」の祖母、母、姉などの親族であることもあり、近所の人の場合もある。

濟州島の潜嫂社会における特徴の一つは、お互いの呼称にも見られる。「ブルトク」でお互いを呼ぶ呼称は非常に単純である。「オモニ（母）」、「サムチョン（いとこ）」、「オンニ（お姉さん）」、「アウ（妹）」で全部である。

一般社会でよく用いられる婚姻によって生じる呼称、または日常生活における契約関係によるあらゆる呼称はほとんど無視されがちである。

これは専門職業の集団における共同体意識の表れと見なすことができる。全員は同一の職業を持ち、同じ職場で一緒に生活する仲間としてのつながりを何よりも重要視するからであろう。

「下潜嫂」が海の慣れ方、潜水の方法に至るまで、「中潜嫂」と「上潜嫂」は厳しい師匠であり、作業の仲間である。

どこにどんな「もの」があり、水流の早い海はどこで、その海で波に流されずに泳ぐためにはどのようにすればいいのかなど、とても具体的に潜水全般についての行動の方法を伝授する。これらのことは、先輩として作業中に体得して理論と実践の両方を、現場で学習させることで行われるのである。

潜嫂が学習し、熟知しなければならないことは、単に海産物を採取するという行為だけではない。潜嫂個人個人の人格を陶冶し、自分自身に厳しく、仲間に寛大で、自然の力の前に人間として謙虚でいられる、ある種の道徳律によった講義も随時繰り返しながら、潜水が始まる日から終わる日まで終始一貫教育され続けるのである。例えば潜嫂が自分を厳

しく律することができないと、自分の能力を過大評価し、海で冒険したがために命を失う危険もある。一例として、能力が優れていると言われている、潜水を始めて間もない潜嫂がいたとしよう。彼女の能力はまだ初歩の段階である。ある日潜って入った岩の間に大きなアワビを見つけた。そのアワビを捕ろうと「ピッチャン」¹²⁾を深く刺した。すぐに梃子でよじるようにして、上に持ち上げればよいと思ったが、逆にアワビはピッチャンをぎゅっと強く噛んでびくともしなかった。子供潜嫂は躍起になる。そのうち、アワビを絶対に捕ってやろうと戦っているうちに、窒息事故にあってしまう。この様な場合には、上潜嫂が教えているとおり、アワビの腹を指したピッチャンが一度で取り上げられないのであれば、あきらめて海の上に出がって助けを求めるべきである。

したがって、「プルク」の事情が大きく変わろうと、上潜嫂が下潜嫂を教育するときに、昔から今まで再三強調していることは「海の中で絶対に欲張らないこと」である。

潜嫂たちは潜水漁業を異句同声に、「あの世とこの世を言ったり来たりするようだ」という。いかなる生命維持の補助装置や手段もなく、ただ一時的に呼吸を止めて作業をする潜嫂にとって、欲張ることはたった一つの命を引き替えにすることだという事実を、彼女たちは痛いほど良くわかっている。

年を取って人生を達観する頃になると、彼女たちは潜水を単なる経済活動の一環とは思わなくなる。したがって、目の前の利益に執着せずに、潜水を通じて人生を豊かにするのだという教えを、年長者の潜嫂は憚らなくなり、若い潜嫂の行動を無理やり統制したりする。「水の下でアワビの口にピッチャンをさして相撲を取っているチョゲン潜嫂を見たら、とにかく水の上に引き上げてしまえ」という言葉からも、このことを見て取れる。

上潜嫂のみが下潜嫂を教育したり、面倒を見たりするのではない。同じ地位のもの同士も、作業の中で絶え間なく関心を持ち、お互いに面倒を見合う。一休みしようと水の上に出がって、「テワク」につかまって息を切らしているときにも、辺りを見回すことを怠らない。もし人影が無く、テワクだけが水の上に浮かんでいるのを見つけると、すぐテワクの主の状況を把握しようと努める。水の下を探し、仲間たちに誰と誰がこの近くに潜っているのかを確認する。仲間が無事であることを確認したときの安堵感と言ったら！潜嫂でなかったら、その瞬間感じる心臓が止まるほど強烈な緊張感を絶対に感じ取れないと、潜嫂たちは言う。

潜嫂が潜っている途中に事故が起きて命を失う例は少なくない。事故の原因が潜嫂のおごりや欲だけによるとも限らない。海の中自体未知の世界ではないか。

潜嫂の作業場における危険要素

潜嫂に害を及ぼす海の生物も少なくない。クラゲは潜嫂の肌に覆い、毒を指すことで皮膚病を起こす。また、カサゴやオコゼの針に刺されると、毒で刺されたところがすぐにぼてっと腫れ上がり、治るまでにしばらく苦勞する。しかし、乳腺炎に掛かったとき、カサゴやオコゼの毒針を乾かし、焼いて患部に塗るときれいに治るので、毒にも薬にもなるのである。この2種類の魚は周囲の色に合わせて変色するので簡単に見分けられない。「ブルトク」ではそのような天敵をすぐ識別できる方法に至るまで、すべてのことを教える。

潜嫂の天敵中最も恐れるべきは鮫である。济州島の海には人喰い鮫が減多に現れないが、それでも安心するほどではないので常に緊張している必要がある。西海岸、その中でも忠南の泰安半島と、白翎島あたりに出稼ぎに行く潜嫂は、いつもではないがたまに人喰い鮫にやられて命を失う場合がある。

また济州島の海に群をつくって現れるイルカも潜嫂の作業を邪魔する。イルカは比較的小となしく、直接は潜嫂に襲いかからないが、潜嫂の近くまで群れで泳いできて波を起こす。餌を取るときの泡をたてる習性のために、潜嫂がその中に巻き込まれると、ヒレなどに肌を擦って傷つく場合がある。そこで、イルカの群が海に現れると、潜嫂たちはいったん潜水を中止して、歌を合わせる。

「ペアロ……ペアロ……」

イルカの群れは潜嫂たちが張り上げた声を聞き入れたかのように、不思議なことにも静かに海の下に沈んで、白い腹を見せながら泳いで通り過ぎてゆく。

ベテランの潜嫂でなければ必ず引っかかってしまう危険なものももう一つある。海に蜃気楼のように現れる虚像「ムルハルマン（水ばばあ）」¹³⁾である。『『ムルハルマン』は岩礁に座って、潜水から上がってきた潜嫂に手招きをする。』それが虚像であることを知らずに、潜嫂が反応すると病気に掛かる。

作業中、ある時ふと潜嫂の魂を惑わす虚像に魂を奪われないようにする知識と対応の方法を伝授するところも「ブルトク」である。

最近になって沿岸を航海する漁船や観光遊覧船、モーターボートなども潜嫂の天敵として新たに現れた。ほとんどの船は動力船であり、船尾の下にスクリューがあるので、潜嫂が作業中スクリューに巻き込まれる事故が起こることもある。

潮流をしっかりと把握することも潜嫂には重要である。満ち潮と引き潮の流れは、方向と速さが場所によって異なる。したがって、潮流に敏感にならなければならない。潮の流れを無視してしまい、万が一広い海の沖に向かって流れる潮流に乗ってしまうと、陸から遠

くにさらわれてしまう。

いくら「ブルトク」での教育がしっかりしていて、潜嫂個人個人が気をつけていても、人の集まって生活する社会であるからには、不慮の事故がどうしても起こってしまうものである。

できるだけ注意に注意を重ねて、無事に1年を終えたとしても、現実的には災害事故が2,3件は必ず発生する。

この頃は、年輩の潜嫂が改良型の潜水スーツを着用することによる事故も無視できない。改良型の潜水スーツを着るとうまく海に潜れない。年を取るほど浮力に対する抵抗力が衰え、「ポンドル」という錘を多く身につけてから海に潜る。通常、若い潜嫂は2kg程度の錘を帯のように腰に巻くが、60歳を超えた潜嫂は4kgから6kg、多いときには10kg相当の錘を腰や首に巻いて潜水する。

事故は錘の重さのために起こるのではなく、錘と錘をつなぐ紐に海草類などが絡まって、海から上がることができなくなることによる。

潜嫂の事故死と「ケダッキ」

どの「ブルトク」でも一番名誉に思うことは、仲間の潜嫂が作業中に命を奪われることの無いことであるという。しかし、実際にはそのような「ブルトク」をたやすく見つけることはできない。

潜嫂が潜水作業の途中に事故にあって命を失うようなことがあると、その「ブルトク」だけでなく、集落すべての「ブルトク」では一時的に潜水作業を中止する。

死体が海に浮かび上がらなかつたり、潮流に流されて発見できなかつたりする場合には、全集落の潜嫂が皆率先して搜索作業に出る。何日間も死体を探すことができない時には、搜索作業を中断して死体が自然に海面に浮かび上がってくるのを待つ。そうやって待っていると、満ち潮に乗って浜辺に死体が打ち上げられる。結局最後まで死体を探すことのできない場合も多い。

死体を見つけると、(探すことができなくても、一定の期間が過ぎた後に)まず葬式を行った後に海岸で「ケダッキ」のクツ(巫女による祈祷)を行う。

このクツを行う目的は、一つ目に、海の下に沈んだ靈魂を引き上げてあの世へ安らかに送ることであり、二つ目に、潜嫂ひとりの非業の死によって汚れた海で厄を祓い、清めることにある。

「ケダッキ」は潜嫂会が主になって集落全体で行う。およそ1日か2日間かけて行われ

るこのクツで、死者の靈魂を鎮める。

「ケダッキ」の途中に、死んだ潜嫂の靈魂が所属していた「プルトク」の潜嫂に取り憑いて、生命を失ったことでこの世に残した未練を突然語り出す場合もしばしばある。

潜嫂の中には、原因不明の病気を患うものが時折いるが、病名もわからずに苦勞する場合が多い。そういった中で、病気治しのクツも行われる。これを潜嫂の社会では「チュヌクツ」という。このクツで患者は「ソウジュッソリ」¹⁴⁾に合わせて胸のしこりを払い出し、体内がすっきりしきれずとも、快感に陥って倒れるまで思いっきり踊る。

潜嫂の葬式は普通の人と異なる手順で行われる。唯一、仲間の潜嫂たちが白い手ぬぐいを頭に巻き、2列に伸びた長い白布を持って葬式の行列の先頭に立つ点が異なる。

彼女らの仲間であった、死んだ潜嫂をどこへ送ろうとするのであろう。どこへ送ろうと道案内をしているのであろう。ただ土の中に埋めて終えようとしているのだろうか。

第3節 濟州島の潜嫂の世界

潜嫂は死んだ人が行くところについて、自分が死んで行くところについて、二言のみ口にする。

「あそこ、いいとこにいくんだらう、たぶん」

「死んだらそれっきりだよ」

彼女たちの単純な答えだけ見ると、潜嫂には来世があろうが無かろうがそれほど重要ではないように見える。「あの世なんかどこにあるの？」という感じである。しかし潜嫂共同体では、毎年祭りのように行う祭儀を通じて、共同体の無事安寧を祈願し、現世と来世での福を祈り、先に逝った靈魂を鎮める。

二つの儀礼、彼女たちの祭り

陰暦2月に漁業に携わる人々、および経営者らは合同で「靈灯クツ」を行う。また陰暦正月から3月にかけて、潜嫂だけでもう一つの祭儀を行う。「潜嫂クツ（一部では海女クツとも言う）」がそれである。

靈灯クツは2月1日から15日まで2週間かけて行われるクツで、春を迎える祭りの一種、つまり春風の神「靈灯」^{ヨントゥン}を迎える行事である。春の風が吹く時期と、クツが行われる期間が正確に一致する。

農耕社会では、春の訪れる音がとても重要である。畑を耕し、種を蒔く時期と気候とは密接な関係があるからである。

「靈灯クツ」は、最近までまれではあるが中山村でも行われた。この様な観点からすると、「靈灯クツ」は厳密な意味で、潜嫂と漁師などの漁業従事者と経営者のみの祭りにとどまらず、濟州島民全体のクツであったが、時が経つうちに沿岸集落の住民を中心に行われるようになったようである。

濟州島では年が明けて「靈灯クツ」を行う前まで、本格的な漁獵も潜水作業もしない。特に、陰曆2月を「靈灯月」と言い、靈灯神が濟州島に上陸する1日から、離れる15日までは漁獵と潜水を禁忌としている。家事にも制約が伴う。白い洗濯物は外にかけないこと、壺の蓋を開けないこと、等である。

実はこの時期は、中国からの黄砂の風が吹いてきて、濟州島の全域を黄色く覆い被せる時期である。

「靈灯クツ」を行う主な目的は、1年間の農作物や水産物の豊作・豊漁を祈願するものである。この様なことを勘案すると、「靈灯クツ」は春を迎える祭りであるだけでなく、豊作・豊漁の祭りであると言えよう。

クツは終始一貫共同体で行われる。一連のクツには個人個人の幸福を祈り、占いを行う行事も用意されている。また、海でなくなった靈魂を鎮め、忘れ去った存在では無いことを思い起こさせる。死者は死んでも共同体の祭儀を通じて、共同体の中に常に生き続けているのである。

「靈灯クツ」とはクツの性格や内容が異ならないが、潜嫂によって行われる儀礼を「潜嫂クツ」という。

「潜嫂クツ」は「靈灯クツ」とは異なり、集落によって行われる期日が違う。不確定ではあるが、いくつかの集落では期日が決められている。例えば、東金寧里¹⁵⁾の潜嫂会が行う「潜嫂クツ」は、陰曆3月8日であり、新興里¹⁶⁾では正月1日である。

すべての潜嫂共同体が「潜嫂クツ」を行うのではない。ある潜嫂集団では「靈灯クツ」を「潜嫂クツ」の代わりとしている。

「潜嫂クツ」が「靈灯クツ」と異なる点は、徹底して潜嫂集団の祭りでありながら、地域住民のための祝宴の場にもなることである。

「潜嫂クツ」が行われる日は、潜嫂の家族でも潜嫂でない人は、潜嫂の客として招かれて、クツの場にも参加し、ご馳走がもてなされる。

そして、同じ漁労生活をする漁師たちも招待され、集落の男性や官公庁に勤める者も皆招待の対象となる。

クツを通じて潜嫂たちは一つの社会を創り出している。地域社会も彼女らの共同体儀式

に参加しながら、対等なパートナー、地域社会を構成する一員として潜嫂共同体を認識するようになる。

潜嫂共同体は「潜嫂クツ」を行う過程の中で、内部結束力を強める。クツが行われている間、生死や苦楽を共にした者だけの連帯感が生ずる。クツを取り仕切るムーダン（巫女）によって1年間の潜水作業についての吉凶を占い、どんな原因で何が起るのか何となくわかるようになる。また同じ「プルトク」でいろんな事をして共に過ごし、先に「遠いあの世」に行ってしまった靈魂を、「ここ」クツの場に呼び寄せ、共に踊り歌う。

「潜嫂クツ」のメインは「シドゥリム」という演目である。潜嫂はムーダンの合凶によって2つのグループに分かれる。そして各グループで一番純潔な者¹⁷⁾、潜水が上手な者、かけっこが速い人の者から若い者1人を選ぶ。彼女たちを「選手^{ソンス}」と呼ぶ。2人の選手は2つに分けたグループの代表となる。

ムーダンが小さな袋に、米、粟、麦、豆、キビなど五穀の種を一握りずつ入れる。両選手はいつも潜っている海を2つに分けてそれぞれの担当を決めた後、合凶に合わせて袋を担ぎながら走る。そして、まるで陸上選手のように自分たちの潜っている海岸の隅から隅まで走りながら、袋に入っている五穀の種をまんべんなくまく。

両選手が全力疾走するわけは、祭場に先に入ってきた選手の担当した海が、後に入ってきた選手の海より豊漁になると言う言い伝えがあるからである。

両選手は祭場にたどり着くと、袋に残った五穀の種をあらかじめあつらえた場所に撒き散らす。ムーダンは五穀の種の分布や種類を見て、どの海でこういった海産物が豊漁となるかを占う。

海の神、靈魂、潜嫂、そして招かれた人々が一つになってクツの場を盛り上げたひとときも「シドゥリム」が終わるとお開きである。

招待された客を先に見送った潜嫂たちは、韓紙で包んだ握り飯である「チ」を、大きな容器にゆで卵や煮魚と共にたくさん盛りつけて海岸へ降りてゆく。そして、海で息絶えた靈魂を呼びながら一つずつ海に投げる。

死んでも濟州島の人々の靈魂は、生きていたときのご飯を食べるのであろうか。これを「チドゥリム」という。

潜嫂共同体は、このような儀礼を執り行うことで、死んだ者と「同じ釜の飯を食べる」と言った共生の死生観を持つ。これは潜嫂の意識世界において、生きている者と死んだ者との境界が非常に希薄であることを端的に示す例である。また、暮らしてゆくために職場

を共にしていた者が、もう生業に携わることのできない状況に置かれている死者に対して、生活の責任を負う義務があるという考えが行為に表れたものであり、クツの中に正式に加えられたと見ることができる。

しかし一部で論ぜられているように、濟州島の人々のいわば理想郷である「イオド(島)」についての概念と同じものではない。逆に、濟州島の人々の来世観には「イオド」が無いのである。

濟州島の女性労働民謡の中に、F1をひきながら歌う歌がある。

イオイオイオドイオドの道はあの世の道よ
履いてた足袋につきあてをして着ていた服に糊付けをして
待ち焦がれても来ること無いだろ

大体この様な歌詞である。この歌での「イオド」はどこかにある島の名前ではなく、歌詞の中に挿入されたかけ声の一種であろう。

「あなたを待っても(死んでどこかに)行ってしまい、再び帰ってこない」という切ない心情を歌っている。

ところが、20世紀の初め、朝鮮総督府の支援を受けて潜嫂社会についての現地調査・研究が、何人かの民俗学者や人類学者によって行われた際、例として取り上げた上記の歌詞を記録する過程で、拡大、任意解釈された結果、「イオド」が誕生してしまったのである。濟州島の人々は海で死ぬと「イオド」という想像上の島に行くというのだが、彼らがそのような想像をする前までは、濟州島の人々、特に海を抛り所にして生活する漁師や潜嫂は、誰としてそのような島を思い描いたこともなかった。

「イオド」に関しては、「海女の歌」を対比させながら、民謡研究家・金ヨンドン博士が潜嫂資料集『濟州の海女』357-366ページに掛けて細かく説明している。

潜嫂は船に乗って他の所へ潜りに行ったり、作業をしに海へ行ったりするときに櫓を漕ぎながら、力を出すために歌を歌う。その歌詞の一部に『「イオド」は獲物が多い海だそうだ。はやく櫓を漕いでそこに行こう』という部分がある。

したがって、濟州島の潜嫂にとって「イオド」とは、生業の抛り所としての豊かな海のことだったと主張している。

1995年に濟州島出身の学者¹⁸⁾が、1930年代に高橋亨が濟州島現地で記録、発刊した『濟州島の民謡』を、編著の形で『濟州島の歌』という名前で発行した。この本の42-43

ページ「3. 身世歌」編には、「イオド」に関して長々と説明されている。「イオド」は「離虚島」と書かれるとの説明までである。この本によると、「イオド」伝説は、既に高麗時代の忠烈王3年の頃から語られるようになったという。さらに、この話を提供した人の名前も記されている。ただし、ハンゲルで「カン氏」と記されているのみである。この伝説の信憑性を証明する意味で、記録場所と提供者、記録日時などが記されているか、あるいは文献によるものであれば、出所を明らかにしていればより良かっただろう。

ある作家¹⁹⁾はその島についての小説を書いている。さらに、数多い文学作品、特に詩を数多く世に出した。

それだけでなく、济州島の南西方向、济州島、琉球列島と東中国が囲む三角地帯の一番下に位置する暗礁（reef）である「ソコトラ（Socotra Rock）」を、1980年代に入ってから「イオド」と断定してしまった。そこの別名が、波が高いことから「波浪島」²⁰⁾と呼ばれているのにも関わらず、である。

現在は潜嫂や漁師ではなくても、济州島民の大勢が「イオド」を知っている。そして、ときとしてその伝説について語る人もいる。これは教育の結果であろうか。しかし、現地でもインタビューをすると、死んだ人は「イオド」に行っているのだろうか、将来死ぬとあそこに行くのだろうかと言う人はいない。むしろ、海で死んだ人の靈魂は海で暮らしているのだと思っている傾向が強い。これもまた具体的ではない。

潜嫂の世界では、現世の空間をより重みのあるものとしている。死んで良いところに行き、良い暮らしをすることを願う以前に、とにかくこの世での良い暮らしを望んでいる。したがって、潜嫂の日常はがむしゃらで根気強いのである。豊かな海だけあれば、暮らしをたてるのに十分であるため、海の豊かさを願うのはやはり当然と言えよう。

定期的に「潜嫂クツ」を行う大きな理由は、ある理想郷を思い描くよりは、潜水作業をする職業人として日常の安寧とよりよい操業環境、操業による収益を望む、切実な潜嫂社会の願いを現実化するためであると言える。すなわち、共同体の構成員各自の現世観を現実させようとする考えに基づく、共同体の祈願のための祭儀が「潜嫂クツ」として表れているのである。

潜嫂の信仰の対象になっている神が「これである」と、現代の意味での宗教的な神を挙げることは難しい。大多数の潜嫂が民間信仰を信じていながらも、仏教や仏教から分派した類似宗教、そして民族宗教と言える「(阿弥)陀仏教」の信徒になる場合も稀ではない。しかし、キリスト教などの唯一神を主張する宗教の信者は少ない。

その原因は、潜嫂にとって唯一神は彼女らの職業観とぶつかるからである。つまり、海

を支配する「竜王神」^{リウワウジン}、春風に乗ってきて畑や海の幸を豊かにする「霊灯神」^{リョウテイジン}、共同体で病気になる者を治したり、海の道案内をしたりする「ケゲンハルマン、ケゲンハルバン」など、彼女たちが信仰している神の世界とは全く異質だからである。また家の誰かが死ぬと神になると信じる「祖上神」^{ソジョウジン}の概念にもぶつかる。

彼女らはいつも仕事場に住んでいる「神々」を身近に感じ、共に暮らしている。潜嫂の作業場は未だ良くわからないことがある未知の世界、海なのである。未知の世界は神秘感を創り出すものである。人間と神、有形的なものと無形的なものと一緒に暮らすには十分な空間である。またそこは、潜嫂には「着物や食べ物」をも与えて、「一家を軽く養うに足る」経済力を保証している仕事場である。

第3章 おわりに：ばらばらになる潜嫂の伝統社会

濟州島の地域社会で潜嫂共同体の存在は非常に大きい。この頃は、濟州島の象徴の筆頭にあげられている。

今や濟州島の海で潜嫂が見えないと、それだけで観光産業に致命的な打撃を与えるほどである。

伝統的に韓国社会で「働く女性」として生きるのは、露骨に表現すれば「卑賤の者」として生きるようなものであった。しかし時代の状況は変わって、「働かない女性」を持ち上げる意識は既になくなった。しかしながら、儒教的な固定観念が染みついた人々は、仕事をしているという理由で潜嫂を「低級な市民」として扱う場合もある。

濟州島の潜嫂は自ずと伝承されてゆく職業共同体であった。しかし現在は、誰もその一員になろうとしない。観光産業に従事することで、潜嫂が稼ぐ所得の数分の一程度より少ない所得しか得られなくても、潜嫂として暮らすことを若い女性はいやがっている。このような結果の根底には、潜嫂共同体が担った役割、経済力、地域社会への奉仕能力などを全く考えず、保守的な思考方式で長い歲月蔑んできた韓国社会の偏向意識が潜んでいる。

それに加えて地域社会も彼女らの存在を、単に経済活動の面からしか見ようとしなかった。今まで政治的、宗教的弾圧にも屈することなく、根気強く彼女たちだけの祭りである「霊灯クツ」と「潜嫂クツ」を行ってきた心意気は、純然たる内部の結束力によるものだった。たくましく、喜びを持って家庭と地域経済を担う「濟州島の女性」としての自負心が共同体を一つに束ねて、支えてきたのである。ところが、第3共和国の時代に、迷信という美名の下に禁止されたが、政治状況の変化により1980年の初めに再び解禁された、

この2つの共同祭儀は、主体となる潜嫂（漁師）共同体の意図とは関係なく、政治的に利用される場合が無くもない。特に、地方自治制が施行された今日では、クツの場が政治家の遊説の場になる傾向もある。また、クツが企画される段階から、外部からの政治的影響力が作用することもある。

以前には潜嫂共同体の最高議決機関であった「潜嫂会」は、漁村契に吸収されて自主権を完全に失ったように、「霊灯クツ」はもう潜嫂（漁師）共同体の手から離れて国の無形文化財として登録された。潜嫂に対しても「潜嫂状」と言う制度が新たに導入されて、自治体の管理下に置かれるようになった。恐らく「潜嫂クツ」も同じ運命をたどる日はそう遠くはないだろう。

潜嫂共同体が能動的、自主的であり包容性がある寛大な集団であるという事を示している宴会の場、共同体の生を奮い立たせ、この共同体を維持している彼女らの力の源泉となっている神聖な祭典である「潜嫂クツ」は、今となってはどれくらい潜嫂の手で執り行うことができるのかは未知数である。

現在は定期的に「潜嫂クツ」を行う潜嫂共同体が少なくなっている。たとえ「潜嫂クツ」を行っていても、クツは縮小されて形式的になるなどの変化を経ている。

潜嫂共同体自身の意識が、「みんな一緒」より「私ひとり」の所得を増やして楽をしようと言う方向に傾いているので、結束力も昔のようには行かない。

時代が変わったのに、潜嫂共同体だけが変わらないことを願うのもある種の間違いであろう。

誰かが人為的に介入するよりは、潜嫂共同体自らがどのように生き残るかに目を向けるべきだろう。

注

- 1) 朝鮮半島のこと。濟州島の人々は「陸地」と呼ぶ。したがって、濟州島と本土の関係から「陸地部」とも表現する。ここでは、「本土」と「陸地」を文章の中で混用する。
- 2) 農業を主として漁業を従とする場合も、潜水や漁猟などの漁業を主として農業を従とする場合も、ここでは「半農半漁」とする。
- 3) 濟州島の住民すべての合意によって名付けられたものではなく、一部地域の住民が自発的に自分たちだけの身分を念頭に置いた呼称、あるいは官僚による身分階級概念が強い居住地域での呼称に過ぎないため、濟州島の住民全員には説得力が弱い。その例として、沿岸集落の住民が「俺はケ村に住んでる」と言うときは、自嘲的で嫌みっぽいニュアンスが強かった。したがって、「お前は班村に住んでるんだな」と言うときも似たようなニュアンスがある。単に班村

住民だけが自ら「班村に住むこと」を自慢していたのである。こうして実際にこの言葉が使用されるときの雰囲気の説明するために「設定した」という表現を使っている。

- 4) 筆者は「済州女性の生活と歴史」という題名で、『済州道議会誌』第10号、及び「韓国国際交流財団」の機関誌である『koreana』1999に、既にこの節の主題に関して論じている。この節では、上記の2つの原稿を引用、補充して記述している。
- 5) 1980年代半ば、典型的な中山村である「チョンイ郡」（城邑里）一帯で生活習慣の基礎調査をしたとき、このような証言を数多く聞いた。非常に興味深かった記憶が生々しい。反面、同時に潜嫂たちをインタビューしながら、中山村の女性が証言したことを確認できた。潜嫂などのケ村女性は、中山村女性のそのような一面を、自分たちと全く異なる女性と見ている点が興味深い。
- 6) 金浄、『済州風土録』
- 7) 高禎鍾、『済州風便覧』、済州島、1930。高禎鍾は、著書「済州の漁業」で、潜嫂の生活者としての優秀性、女性としての優秀性を指摘しながら、「……済州婦女子の海上作業によって、経済的に済州島に莫大な利益がもたらされたことを一般の人々に教えると同時に、このことが朝鮮婦人たちに多少なりとも反省材料になるかもしれない。また世間に疎く、職業を蔑視する両班たちへの参考になる。」と述べ、差別的な見方を一喝している。
- 8) 筆者は「済州の海における潜嫂の四季」という題名の潜嫂資料集を1986年に執筆し1987年に「ハンキル社」から出版した。また、写真家・金秀男氏による済州島の写真資料集『済州島』が日本の「国書刊行会」より日本語で発行されたときも、筆者は潜嫂と漁師に関して執筆した。さらに、1996年に済州道が発刊した生活史資料集・海女編の資料調査及び執筆に参加して、『済州の海女』の「第2章海女の技術」を執筆した。ここで述べている「潜嫂の世界」は、上記の文献に収録した原稿を修正、補完し、再執筆したものである。したがって、上記3冊の文献に収録されたものと同一の文章を含んでいることを承知されたい。
- 9) 1つの集落で保有する海をいくつかの区域に分けたそれぞれを指す名称。
- 10) 康大元、『海女研究』「表2：年齢別に見る潜嫂作業」、韓進文化社、1970、p. 59。
- 11) 潜水道具。浮き袋のことで、以前にはひょうたんを乾かして使用したが、現在では「発泡スチロール」を使っている。潜嫂はここに採集したものをを入れる網袋を吊しておく。潜嫂が海底で作業をした後、海上に上がって少し休むときに使用し、潜嫂仲間には潜っている位置を知らせる目印の役割もする。
- 12) アワビを捕るための潜水道具。長めの柄をもつ刀の一種であるが、刃はない。
- 13) 「ムルハルマン」について、筆者は潜嫂に直接証言を聞いたことはない。しかし、『済州の海女』共同執筆者のひとりである金ヨンドン博士は、これについての証言を聞いたと述べている。ここでは、金ヨンドン博士が記録して記述した部分を取り上げ、引用している。
- 14) 済州島全域で歌われている労働民謡。クツの場で歌われると「ソウジェツソリ」、飼草を刈る野原で歌われると「チョルピヌソリ」、草をむしる畑で歌われると「サデソリ（長いサデソリと短いサデソリに分類できる）」、イワシを捕る漁場で歌われると「メルフリソリ」と名前が付く歌で、先唱である「ソソリ」と、折り返しに当たる「フソリ」で構成されており、仕事の種類や方法によって節を変えて歌われた。
- 15) 済州道北済州郡旧左邑金寧里東金寧地区

濟州島の潜嫂共同体の生活と仕事

- 16) 濟州道北濟州郡朝天邑新興里
- 17) ここでの「純潔な者」とは、ここ3年家族に死者が出ていない者、現在生理中でない者、クツの場に来る前に性行為をしなかった者などを指し、通念上どんな祭儀を主催するにもふさわしい、不浄ではない者を意味する。
- 18) ジャ・ヘギョン、濟州大学校講師。濟州道文化財専門委員。(1995年現在)
- 19) 李チョンジュン。『イオド』の作者。
- 20) この島についても濟州島民の意識は非常に観念的だと見るべきであろう。その根拠として、耽羅国の開国神話にも、「高・良（後に梁）・夫」の配偶者になろうと濟州島に船でやってきた3人の姫の故郷が「波が立つ所」と言う意味の「壁浪^{ビョクラン}国」であることになっている。本来の音は「ポルラン（濟州島の方言で、波が立つ所、という意味を含んでいる）」であったが、知識人によって「壁浪国」と表記されるようになったという主張も時折なされる地域名である。

引用・参考文献目録

- 『濟州海の潜嫂の四季』、ハンキル社
『濟州の海女』、濟州道
『女性宗教生命共同体』、女性問題研究所
『濟州島の歌』、国学資料院